

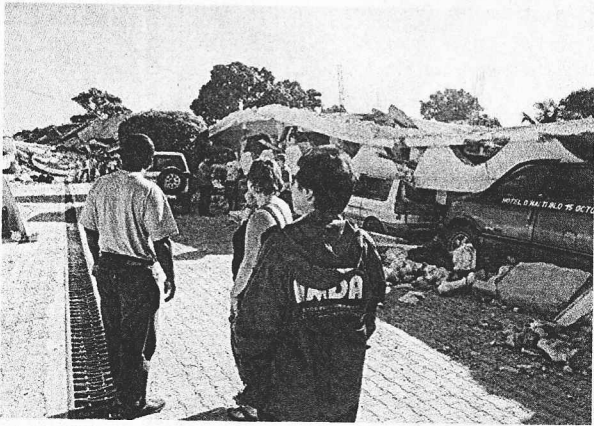
野球好き生きかし復興を

アムダ・菅波代表ら ハイチ支援報告

死者15万人と言われる大地震が発生したカリブ海の島国ハイチで、医療支援にあたっている国際医療NGO「AMD A(アムダ)」（本部 岡山市北区）の菅波茂代表と岡山大病院の朴範子医師が帰国し、28日、岡山市内で記者会見した。菅波代表らは「政府が崩壊している」「各国の医師も(国ごとに異なる)治療方法を巡り、対立があった」などと、現地の混乱ぶりを語り、今後の活動については、手術など緊急医療を2月末まで行い、復興段階ではスポーツなどを通じて、PTSD(心的外傷後ストレス障害)患者らへの対応に取り組むとした。



④記者会見する菅波代表(左)と朴医師
⑤建物が崩壊し、車が押しつぶされたポルトープランス(アムダ提供)



アムダは、第一次医療チーム(4人)が現地時間の18日に活動を始めてから、これまでに第6次チームまで計18人が現地入りした。1月末までは、被害が大きかった首都・ポルトープランスの北西120キロのゴナイブの病院で、緊急医療を実施する。菅波代表は、すでに緊急の手術が必要な時期は過ぎたと判断しているが、2月も国境付近にあるドミニカのヒマニに移って医療活動を

続ける。

菅波代表は今回の救援活動について「これまで50か国1000件以上の支援をしてきたが、政府が崩壊した状態は初めて。治安も、(水の確保など)活動に必要なインフラも、民間団体を受け入れてくれる相手もない。出口のない救援活動だ」と述べた。

現地の様子については「大きなビルの近くで死臭

が強かった」と話し、朴医師も「けがで足を切断せざるを得ない子どもは、事実を受け入れられない様子で、精神的ケアが必要だと感じた」「英語が通じず、情報収集が難しかった」と語った。

今後は、治安が確保された場所で活動するとしており、日本国内の義足メーカーの協力を得て、足を失った人たちの歩行訓練にも取

り組むとしている。

また、緊急事態が落ち着くと考えられる3か月後半後からは、野球好きのハイチの国民性を生かし、ドミニカの社会人野球チームなどと連携し、復興に向けての気持ちを高めてもらう活動をする。ドミニカの日本人移民や、移民のなかでの割合が高い沖縄県、現地のNGOの3者と協力できると、調整も進めている。